

次世代モビリティ

空の移動革命への挑戦 ～日本発 空飛ぶクルマと 物流ドローンの開発～

(2022年2月8日(火) 21世紀播磨科学技術フォーラム設立30周年 兼
播磨圏域ものづくりプラットフォーム改組記念セミナーより)



株式会社SkyDrive
代表取締役CEO
福澤 知浩さん



SkyDriveを、2018年7月に設立しました。人が乗る「空飛ぶクルマ」と、荷物を運ぶ「物流ドローン」の開発・製造・販売・運航/運用サービス等を行っています。ものづくりが好きでトヨタ自動車に入社したのですが、調達部門にいた時、ITが急速に進歩していることに気づきまして、なにかイノベーションを起こせないかと有志メンバーでアイデアを出す中で、空飛ぶクルマが出てきました。今は航空機やドローンのエンジニアが加わって開発を進めています。拠点は愛知県豊田市。開発と飛行試験場が同じ場所にあることが大きいアドバンテージです。明確な定義はないが、「電動」「自動(操縦)」「垂直離着陸」が一つのイメージ。飛行機やヘリコプターとの違いとして、主に3点特徴があります。1つ目は電動です。部品点数が半分以下になるのでコストが下がるし騒音も約1/3に減ります。CO₂も排出しません。2つ目は自動。自動運転も可能になります。3つ目は垂直離着陸。離着陸場などのインフラが小さくて済みます。このように、騒音や操縦難易度、機体価格が、既存の航空機でなく自動車に近づき、空の日常利用を可能にするモビリティと言えます。2050年までに900兆円以上の市場に成長すると予測されています。



100年に1度のモビリティ革命を牽引する

これが我々のミッションです。昔は、連絡手段といえば固定電話でしたが、携帯電話の登場で一気に情報格差がなくなり、オンデマンド・双方向でコミュニケーションがとれるようになった一方で、移動に関しては未だに道路か線路といったインフラが必要です。空飛ぶクルマが普及すれば、こういった地域格差がなくなって、いつでも行きたいところに行ける世界が始まります。世界中で600プロジェクトが進み、人を乗せて飛行試験に成功したのが十数社、日本では我々のみです。機体サイズは大きく分けて2種類あり、1つ目が5人乗り、移動距離100～300km。2つ目が2人乗り、都市内を小さな離着陸場を含めて結ぶもので移動距離は20～30km、我々が開発を進めている機体です。

日本をはじめアジア諸国のように人が密集している地域では、どこでも離発着できるコンパクトな機体がいいと思っています。世界で開発競争が活発化しており、海外メーカーが先行して実用化に取り組む中、スタート時期の遅い我々が猛追しているといった構図です。

2025年「大阪万博」で遊覧飛行を

2020年夏に、「空飛ぶクルマ」の公開有人飛行試験を行ったところ、反響も大きく、世界112カ国で報道されました。空飛ぶクルマのユースケースとして、観覧車の代わりに飛ばして遊覧したり、ドクターヘリよりもコストを抑えた医療現場で活用したり、といったことを想定しています。まずは沿岸部の2点間を往復する、より安全を担保できる形でスタートさせたいと考えており、2025年「大阪万博」での2人乗り遊覧飛行を事業目標と定めています。この姫路にもしばしば来ることがありますが、この瀬戸内海は温暖で風があまりなく、島が多いため、周航率を考えた時に非常に魅力的です。大阪から淀川沿いに京都に向かうプラン、瀬戸内海で岡山・広島方面に向かうプランなど、各方面の方々と協議していきたいです。インバウンドが回復する頃を見据え、開発を進めていきたいと思っています。



2021年9月14日にアジア太平洋トレードセンターにて行われた
連携協定締結の様子
左から、大阪府知事 吉村洋文、SkyDrive 代表取締役CEO 福澤知浩、
大阪府市長 松井一郎(敬称略)

新しいモビリティによって、これまで車で2～3時間かかり電車を乗り継がないと行けなかったところが、簡単に自動運転で行けるようになります。そうすると、世界が広がり、移動や生活の豊かさに繋がると考えています。我々のような日本発のものづくりベンチャーがパワーアップして、より成果を出し、日本のものづくり産業を活性化する、そんな世界を皆さんと一緒にさせていただきたいと思っています。